

レジャー施設の 2 割 「チケット代」を値上げ、 フリーパスは 5 千円超え

チケット平均は 5 年間で 3 割超の値上げ
「気軽に買えない」価格をどう訴求できるかカギ

2026 年「主要レジャー施設(テーマパーク)」価格調査



本件照会先

飯島 大介（調査担当）
帝国データバンク
東京支社情報統括部
03-5919-9343(直通)
情報統括部:tdb_jyoho@mail.tdb.co.jp

発表日

2026/07/16

当レポートの著作権は株式会社帝国データバンクに
帰属します。

当レポートはプレスリリース用資料として作成して
おります。著作権法の範囲内でご利用いただき、私
的利用を超えた複製および転載を固く禁じます。

SUMMARY

国内の主要レジャー191 施設(テーマパーク・遊園地、水族館、動物園)のうち、2026 年に入場料などの「チケット料金」を値上げする施設は 50 施設・約 26%で判明した。前年(71 施設・37%)に比べ、値上げとなるレジャー施設は 3 割減少した。

株式会社帝国データバンクは、全国の主なレジャー施設におけるチケット料金動向について調査・分析を行った。

[調査対象] 全国の主なレジャー施設(遊園地・テーマパーク・動物園・水族館)計 191 施設。なお、対象の変動は下記の通り

■ 新規 :ポケパーク カントー(東京)

■ 対象外:ノースサファリサッポロ(北海道、閉園)、東京ドームシティ アトラクションズ(東京、休業中の為)

[注 1] 一般券(入場料)=チケット料金のうち、施設へ入場するための金額。

フリーパス=チケット料金のうち、1Day パス料金または回数券・体験料金(入場料未設定時)。

[注 2] 「遊園地」は、大規模な体験型アトラクション(遊具)を有するテーマパークを含む

[注 3] 一部施設での料金設定および施設区分の定義変更を行ったため、2025 年以前の価格について再集計を行った。

修正後の数値は本調査データに反映されている

主要レジャー施設の 2 割で「チケット代」値上げ、前年から減少

国内の主要レジャー191 施設(テーマパーク・遊園地、水族館、動物園)のうち、2026 年に入場料などの「チケット料金」を値上げする施設は 50 施設・約 26%判明した。前年(71 施設・37%)に比べ、値上げするレジャー施設は 3 割減少したものの、人件費の増加分や電気代を転嫁する動きが続いているほか、ハイシーズン時に料金を引き上げる「変動料金制」の導入も進み、値上げの動きが続いた。

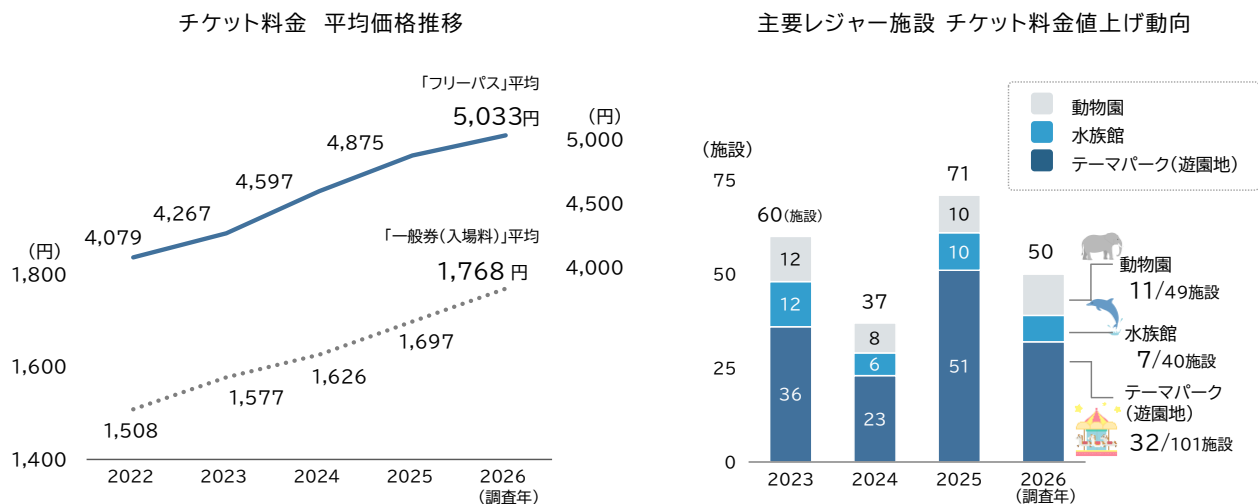
施設別に値上げた割合をみると、「テーマパーク(遊園地を含む)」は対象 101 施設のうち、32 施設がフリーパスを含めたチケット代について値上げした。2025 年(51 施設)から大きく減少したものの、約 3 割のテーマパークでチケット価格が改定された。「水族館」(7 施設)は前年から減少した一方、「動物園」(11 施設)は前年から増加した。

フリーパスは平均 5 千円超え、調査開始以降で初

価格改定前後のチケット料金をみると、チケット種別や施設ジャンルによって傾向が分かれた。2026 年におけるレジャー施設全体の「一般券(入場料)」平均価格(大人 1 名)は 1768 円だった。2025 年平均(1697 円)に比べ 4.2%・71 円上昇し、金額の上昇幅としては 2022 年の調査開始以降で最高だった。このうち、遊園地・テーマパークで多く導入されている、入場料とアトラクション乗り放題がセットとなった「フリーパス」の平均価格(最高額)は 5033 円となり、3.2%・158 円増となった。調査開始以降で初めて平均価格が 5000 円を超え、全チケット種別で最も高額だったものの、値上げ幅は 3 年ぶりに 100 円台にとどまるなど、急激な価格上昇ペースからは一服感もみられる。5 月の GW 期間や夏休み期間などのハイシーズン料金、土日祝日料金などダイナミックプライシング(変動料金制)、追加料金で乗り物の待ち時間を短縮するチケットも登場し、フリーパス・一般入場料ともに価格上昇が進んだ。

この結果、一般的な入場料とフリーパスの平均価格差は、2022 年の 2571 円・2.7 倍から、2026 年には 3265 円・2.8 倍となった。ダイナミックプライシングの導入が確認できたレジャー施設は、対象 191 施設のうち少なくとも 32 施設となった。

主要レジャー施設のチケット価格動向



【注1】 変動料金制の場合はハイシーズン料金(最高値)を採用。
なお、フリーパスは入場料金を含む価格
【注2】 2026年は「ポケパークカントリー」を加えた191施設の平均

【注】 調査対象は190施設(2026年調査で新規対象となった1施設は除く)

施設ジャンル別にチケット料金平均をみると、「一般券」平均が最も高いのは「水族館」の2202円だった。餌代などの飼育コストや電気代、水質維持などエネルギーコストの影響を受けやすく、2022年以降の値上げ率では34.6%増(1636→2202円)と、全施設で最も大きかった。ただ、大幅な価格改定が相次いだ2023年以降は小幅な上昇にとどまり、2026年の上昇幅は前年平均から44円・2.0%増にとどまり、全ジャンルで最も小さかった。「テーマパーク」の入場料は1728円となり、前年平均から106円・6.5%増加した。「動物園」は1473円で、全施設で最も料金が低かった。動物園では、2022年時点(1283円)に比べると1割超の値上がりとなっているものの、テーマパークや水族館に比べると値上げの伸びは緩やかだった。餌代の高騰など物価高の影響で、動物園でも入場料を引き上げる動きが広がっているものの、市町村など自治体・公営による運営が多いため公共サービス色が強く、値上げに対する利用者の反発が大きいことから、値上げ幅が少額にとどまるケースが目立つ。

施設ジャンル別 チケット価格推移

	施設ジャンル別	2022年	2025年	2026年	前年比	2022年比
入場料	テーマパーク（遊園地）	1,445	1,622	1,728	+6.5%	+19.6%
	水族館	1,636	2,158	2,202	+2.0%	+34.6%
	動物園	1,283	1,427	1,473	+3.2%	+14.8%
	入場料平均	1,508	1,697	1,768	+4.2%	+17.2%
フリーパス	フリーパス料金平均	4,079	4,875	5,033	+3.2%	+23.4%

【注1】 変動料金制の場合は、ハイシーズン料金(最高値)を採用。なお、フリーパスは入場料金を含む価格
 【注2】 2025年の料金は、前回調査(7月)以降の反映分を含むため一部修正がある

「気軽に買えない」値段設定、付加価値をどう訴求するかがカギ

値上げが「モノ」から「サービス」へと波及する動きが広がり、花火大会などコト消費にも「一部有料化」や「プレミアム化(高額化)」の動きが急速に進んでいる。レジャー施設でも、電気代や人件費をはじめとした運営コストの上昇を反映した値上げに加え、繁忙期や土日祝日などに通常と異なる料金設定を行う「変動料金制(ダイナミックプライシング)」の導入・拡大など、利用状況に応じた柔軟な料金設定が普及している。

ただ、こうした施策は集客力の高い一部のテーマパークや水族館などに限られるほか、特にテーマパークのフリーパスは2022年比で約23%高くなり、家族4人で来場した場合の負担増加額は数千円規模に達するなど、家計の負担も重くなっている。近年のレジャー消費は「モノ消費」から「コト消費」へ移行しているものの、物価上昇のペースに賃上げが追いつかず家計の実質的な購買力が低下している現状では、大幅な価格改定が来場者の減少を招くリスクも顕在化しつつある。実際に、「若者のテーマパーク離れ」に代表されるように、若年層における高額な価格設定に対する来園意欲の減退や、価格に対する期待値とのズレから、コアなファンや既存顧客のリピーター率が低下するといった動きもみられる。

2026年以降もレジャーチケットの価格は値上げの動きが続くとみられる。ただ、これまでの一律的な値上げではなく、付加価値の高いチケット種別の拡充や変動料金制、さらには訪日外国人向け料金の導入などを通じて収益を確保するなど、「どのような価値なら利用者が対価を支払うのか」を考慮した柔軟な価格戦略が問われる局面に突入するとみられる。